

『学問のすすめ』における新概念

— 「天」と「実学」を中心に

張 陽

The Review of New Concepts in *Guide to Learning*
with Primary Focus on Heaven and Science

ZHANG Yang

Abstract

The so called 'westernized scholar' such as Yukichi Fukuzawa, initially worked on Chinese studies (Hangaku) but gradually moved to Rangaku and Western studies. The Chinese studies stipulate that material once learned should not disappear even if the individuals change their minds. When considering western studies, one notices that traditional Chinese studies supplement the understanding of the western study concept. This paper investigates Fukuzawa's mentality in 'Science Advocacy in Encouragement to Learn'. It had been on the best seller's list for many years in Meiji Era. The two concepts of 'Heaven' and 'Actual Science' are incorporated into it. Although these two concepts have already previously established themselves in Chinese studies, Fukuzawa used it and clarified that the new concept was created by disclosing Western studies.

Keywords: 福沢諭吉, 学問のすすめ, 明治, 文化交渉

はじめに

日本近代において、文明開化の時代以来、多くの欧米の言葉が漢字を使って翻訳されたが、これらは外来語の一種と見なすことができる。「社会」や「個人」、あるいは「権利」、「自由」、そして「恋愛」なども、漢語、すなわち中国語のように見えるが、実はもともとは欧米語の翻訳語であって、その発明者は中国人ではなく、文明開化の時代の日本の学者であった。

「社会」、「個人」、「近代」などのまったくの新造語と、そして「自然」、「権利」などもとからあった語に新しい意味を加えた語——この二種類の翻訳語は、その「特有の効果」によって、言葉の意味の分かりにくさや矛盾が隠されているものの、そのことが人々には気づかれにくい。特に新旧の二つの意味を持つ語では異なる意味が混在し、しかもその二つの意味が矛盾している場合すらある、というのは柳父章の著書『翻訳語成立事情』の理論である。柳父氏はこの現象の原因として「カセット効果」を挙げる。「漢字・漢語を見ると、そこに意味があるのだと、自然に無意識に思ってしまうけれども、その形と意味とは、そもそも切れたもの¹⁾」と柳父氏は述べている。新しく作られたばかりの言葉はできたばかりの宝石箱 (cassette、カセット) のように、まだ中には何も入っていないのだが、外見はそれだけできれいで、魅力がある。その中に絶対何かいいものが入っているはずだという確信が見る者を惹きつけてしまうというのである。

しかし、筆者が目じりたいのは、外来語の「宝石箱」という表象が裏付けている明治草創期の画期的な思想転回である。その転回とは、例えば、福沢諭吉のような「洋学者」は初期において漢学に励み、次第に蘭、洋学に移り、漢学を敵視したが、教養として身につけた漢学は自然に消滅するはずがないし、初めて蘭、洋学を習得する時に和、漢学の知識が働いたことは言うまでもない。彼らはどのように初めて「西洋学」を理解し、提唱したのか。この問いこそは明治における東西文明の交渉の始まりを整理する第一歩だと思われる。

本稿は、福沢諭吉の『学問のすすめ』の論拠を調査し、その中から「天」及び「実学」という二つの概念を取り上げる。この二つの概念は当時の漢学においてすでに定着していたが、福沢はこれを利用し、西洋学を論述することによって、新たな概念が創出させたことを明らかにしたい。

第一章 天は人を造らず

「天は人の上に人を造らず、人の下に人造らずと云へり……」というのはいまにも有名な言葉である。丸山真男やのち丸山を批判する安川寿之輔もこの語の意義を取り上げているが、い

1) 柳父章 『翻訳語成立事情』(岩波新書、1982年) 20頁。

ずれもこの文の中に隠された「天は人を造る」という重要な観点と、日中における伝統的な「天人観念」との矛盾に注意していないようである。「天は人を造る」というイメージが成立すること自体が翻訳語の語彙の変移が思想面に影響することに他ならないのではないかと思われる。

1. 「天」は「空」を意味するだけではない

今日の日本において「天」という言葉を単独で使う表現はあまり見られないものの、他の語と組み合わせて日本人の生活の中に馴染んでいる。例えば「天才」「楽天」「天気」「先天」「後天」などがそうである。それらの言葉を日本語の辞書ではどう解釈しているだろうか。『広辞苑』²⁾（第六版）においては

「天才」天性の才能。生まれつき備わったすぐれた才能。また、そういう才能を持っている人。

「楽天」① 人生を楽観すること。② 自分の境遇に安んじてあくせくしないこと。

「天性」① 天から受けた性質。② 生まれつき備わっている性質。天資。

「先天」（天に先だつ意）生まれつき身に備わっていること。後天。

これらの言葉はもともと「天（そら）」とはまったく無関係で、頭上の遥かなる「天（そら）」をいつの間にか特別な存在としてきたようである。同じく『広辞苑』の「天」の項目をひくと次のようになる。

- ① 地平線にかぎられ、はるかに高く遠く穹窿状を呈する視界。そら。↔地。
- ② 〔天〕地球をとりまく空間。または、それを仮想の球面（天球）に投影したもの。
- ③ 自然に定まった運命的なもの。生まれつき。
- ④ 〔宗〕天空にあって、神または天人・天使が住み、清浄であるという想像上の世界。死後、人間の靈魂がここにのぼるとしんぜられると信ぜられる所。天国。楽園。
- ⑤ 〔仏〕ア（梵語 deva 提婆）天上に住むもの。神々。イ（梵語 svarga）神々の住む領域。
- ⑥ 高いところ。ものの上。部。「天地無用」
- ⑦ はじめ。あたま。「ーから読めない」

これらの七つの意味はほぼ三つの種類に分けられよう。

一つ目は①②⑥⑦のような客観（理性的）なもの、「そら」と物の上部などはこれに属する。

二つ目は④⑤のような主観（感情的）なもの、神及び神にかかわるもの、そこには明らかに人の感情が投影される。ここで注意すべきなのは「神が住む場所」が「神そのもの」との混同されるようになることである。

三つ目は③のような理性と感情が交わった特殊なもの。「自然」と「生まれつき」、この二つの意味がそもそも矛盾しているようにも思われる。語素とする「天」は客観的な「そら」か、

2) 『広辞苑 第六版』（岩波書店、2008年）。

主観的な神か、明らかに分けられないし、どちらでもない場合も考えられる。例えば、天賦、先天など。

さらに、『日本国語大辞典』（小学館、2003年）や白川静の『字通』（平凡社、1996年）、『字訓』（平凡社、2007年）、『字統』（平凡社、2007年）の「天（てん、あま、あめ）」の項を参照すると、「あま」「あめ」は「天」の訓読みとされているが、その意味する内容が一層豊富に記載されている。

例えば「天」は日本の神だけでなく、仏教やキリスト教の神から神が住む場所まで適応できる“汎用性”がある。「あま」「あめ」の場合、日本本土の神（天つ神など）のイメージが入ってしまっていて、しかもその意味が時代によって強調されることがあるように思われる。時代や集団によって語彙自体の印象が当然変わることになると思われるが、それでも「てん」と「あま、あめ」は日本人の意識の中で区別されている。「あま、あめ」はより日本式かつ伝統的であり、それに対して「てん」は外来語ふうということになる（同じ外来語だとしても、漢学者の目には使命や倫理など「大きなもの」が出て来るが、キリスト教信者の頭の中は西洋風の画像が映るかもしれない）。

そもそも「天」という漢字の原義は何であろうか。

『康熙字典』では、多数の具体例が挙げられ、様々な人物や書物を引用している。例えば荀子の言葉を借りて、

天無實形，地之上至虛者皆天也³⁾

（天は充実した形はない、地の上から虚に至るまでは天である）

と説明した。また、『説文解字』の中に簡潔でありながら、興味深い解釈がある。

「顛也。至高無上，从一大」

（頭上。一番高くてその上はない。「一」と「大」を組み合わせた。）

清の段玉裁が著した『説文解字注』はこの解説にさらにまた注釈を加える。

是其大無有二也。故从一大。⁴⁾

（この天の大きさには同じものがない。だから「一」と「大」を組み合わせたのである。）

日本語の辞書が、「天」という特別な存在の「（神にかかわる）部分」を明白にしようとしているとすれば、それに対して、中国古典の中では、「天」の「偉大さ」を強調しているといえる。言い換えれば、現代日本語辞書では「天とはなにか」を解釈しようとしているが、中国語古典では「天とはどんなものか」を説明しようとしている。

だから、中国古典の中の「天」より、日本語の中の「天」はより鮮明なイメージを持っていると言えるだろう。『学問のすすめ』中の「天」の使い方はこの点と深い関係があるように思われる。

3) 「中国哲学書電子化計画」(<http://ctext.org/zh>)。

4) 同上。

2. 翻訳語としての「天」

『学問のすすめ』の本文において、以下のように記されている。

天は人の上に人を造らず人の下に人を造らずといへり。されば天より人を生ずるには、万人は万人みな同じ位にして、生まれながら貴賤上下の差別なく、万物の霊たる身と心との働きをもって天地の間にあるよろずの物を資り、もって衣食住の用を達し、自由自在、互いに人の妨げをなさずしておのおの安楽にこの世を渡らしめ給うの趣意なり。（『初編』）⁵⁾ 「といへり」が示すように、「天は人の上に人を造らず人の下に人を造らず」という表現はどこかからの借用である。はっきりした証拠があるわけではないが、福沢自身が翻訳した『アメリカ独立宣言』で非常に近い表現が用いられている。

（前後文脈略）天ノ人ヲ生ズルハ億兆皆同一轍ニテ、之ニ附与スルニ動カス可カラザルノ通義ヲ以テス。

（原文） All men are created equal, that they are endowed by their Creator with certain unalienable rights.⁶⁾

『翻訳と日本の近代』において、丸山真男は、これこそ「天は人の上に……」の原型であって、「基督教の神とか造物主という概念は、伝統思想の中にありませんから中国古典思想における『天』をもってきて、これ（Creator）にかえている」と説明している。ここでの問題は、丸山のこの「日本の伝統思想にない」という点である。福沢は中国の古典思想の「天」によって（中国の古典思想では、Creatorの概念があるかどうかはさておき）Creatorに対応したと言われているが、ここで天が翻訳語であるとはいささかも感じない。いや、正確に言うと、「天」が造物主であることに対してまったく違和感を持たない。翻訳語になる前の「天」と、今使われている「天」の違いは曖昧である。

3. 「創造」と「天」の概念の統合

ダーウィンの進化論が世の中に受け入れられる以前、人間を造ったのは「神」だとされていた。西欧神話で、人間を造ったのは「神」である。例えば、『旧約聖書』では、

神はまた言われた、「われわれのかたちに、われわれにかたどって人を造り、これに海の魚と、空の鳥と、家畜と、地のすべての獣と、地のすべての這うものとを治めさせよう」。⁷⁾ 人間を創造するものは神であって、しかも人間と同じ「かたち」としている。

中国神話ではどうであろうか。儒教思想と一体になっていて、区別できにくいものの、中国では「女媧（じょか）」の神話が存在する。宋の『太平御覧』では以下のように述べている。

俗説天地開闢，未有人民，女媧搏黄土作人，劇務，力不暇供，乃引繩于緇泥中于舉以為

5) 福沢諭吉『学問のすすめ』（岩波文庫、1942年）。

6) 丸山真男 加藤周一『翻訳と日本の近代』（岩波新書、1998年）38頁。

7) 『口語旧約聖書』（日本聖書協会、1955年）第1章第26節。

人。故富貴者黄土人也，貧賤凡庸者繩人也。⁸⁾

(俗は説く、天地が開闢してから、民はいなかった。女媧は黄土を捏ねて人を作った。すごく手間がかかって、力が大変使ったので、彼女⁹⁾は繩を引いて泥に入れた。揚げたら(繩から落ちた泥が)人になった。だから、富貴な人は黄土から作られたの人、貧賤凡庸な人は繩で作らてた人である。)

『旧約聖書』でも、「女媧」の神話でも、「造物主」は同じく実在していると考えられており、おまけに人間同様のかたちまでしている。

日本では「国産み・神産み」という伝説が創造神話として伝えられている。伊邪那岐(いざなぎ)と伊邪那美(いざなみ)、この二つの神が結婚することによって、大八島(おおやしま)を構成する島々と、海や山など自然の事物に関連する神々が生まれた。そして最後に生まれたのは天照大神(日の神、高天原を支配)・月読命(月の神、夜を支配)・須佐之男(海を支配)である。

人間が住むところの「葦原中国(あしはらのなかつくに)」と、地の中にある「根の国(ねのくに)・黄泉(よみ)」に対して、天の神々(天津神)が存在する「天(あま)・高天原」はある。葦原中国を統治すべきは高天原の神だとされ、何人かの神が派遣された。葦原中国の神々(国津神)はとうとうそれを認めて自分の国を譲った(葦原中国平定)。のち、天照大神は自分の息子に人間界である葦原中国を統治せよと命じたが、息子はまたこの使命を更に自分の息子に譲った。結果として、天照大神の孫が天から降りたという(天孫降臨)。

もう一方、「天」は儒教のあらゆる思想と密接にかかわっている。

「天子」という称号は周の礼儀の中の頂点に位置し、周から¹⁰⁾はみながこれを名乗った。班固は、勅命によって編著した『白虎通義』(西暦79年頃)の中で、「天」を使って、皇帝の正統性、絶対性を解釈した。

王者，父天母地為天之子也¹¹⁾

(王は、天を父、地を母とする天の子どもである。)

こうして、皇帝は「天」の子どもになった。

秦以後、「天」の役割は更に大きくなり、人の道徳や身体そのものまで「天」と関連づけて考えられるようになった。例えば、皇帝が国を統治するための理念となった「天人相関説」では以下のような説明がある。

8) 『太平御覧』「卷七十八・皇王部三」(977年～988年)本書は類書(書物を紹介する本)である。本文は『風俗通』という本の中からの引用とされたが、『風俗通』(2世紀)は部分的にしこ残っていないため、現存の部分では似たような表現は存在しない。「中国哲学書電子化計画」(<http://ctext.org/zh>)。

9) 『説文解字』「卷十二・女部・媧」では「古之神聖女、化萬物者也」と解釈している。

10) 秦は例外で「皇帝」と自称された。

11) 『白虎通義』卷一・爵、中国哲学書電子化計画 (<http://ctext.org/zh>)。

天乃有喜怒哀樂之行，人亦有春夏秋冬夏之氣者，合類之謂也。¹²⁾

（天にも喜、怒、哀、樂の行為があり、また、人にも春、秋、夏、冬の気がある。同じ類ということである）。

さらに具体的には、

……為人者天也……人之形體，化天數而成；人之血氣，化天誌而仁；人之德行，化天理而義。人之好惡，化天之暖清；人之喜怒，化天之寒暑；人之受命，化天之四時。

（……人を作ったのは天である……人の体は、天の命が化して成る。人の血魂は、天の志が化して仁になる。人の道徳は、天の理が化して義になる。人の好悪は天の温かさとしらやかさが化する。人の喜びと怒りは、天の寒さと暑さが化する。人の命は、天の四季が化する。）

漢以前のような神話の彩色が濃い「天人関係」に対して「天理人欲」を唱えた宋明理学は「天」「人」にかかわる学説のピークと思われる。一方、それに反対する観点も確かにあった。例えば謝肇淛（しゃ ちょうせい）が著した『五雜俎』では天に対する感情はもっと冷静だった。

釋氏以為有三十三天，幻說也。……

語曰六合之外聖人存而不論。噫，非不論也，所謂極其至雖聖人亦有所不知也。

朱晦翁曰天者，理而已矣。夫理者天之主宰也，而謂理即天，終恐未是。理者虛位，天者定體，天有毀壞，理無生滅。如目之主視，耳之主聽。世有無耳無目之人，視聽之理，將何所屬。¹³⁾

（釈迦は三十三天があるといっているが、それは幻説である。……「六合（天地と四方）のほかの言葉、聖人は措いて論じない」というが、決して論じないのではない。いわゆる物の究極をきわめるといふことになると、聖人といえども分からないことがあるのである。）

朱晦翁は「天は理のみ」といっている。そもそも理とは天の主宰者である。しかし理が天そのものだと考えるのは、究極においてまだ完全に正しくはないであろう。理とは虚位である、天とは定体である。天には壊されることがあるけれども、理には生滅がない。目が視覚をつかさどり、耳が聴覚をつかさどるようなもので、世間には耳の無い人、目の無い人がいるのであるから、視覚と聴覚の理は一体どこに属するのであるか。）

謝肇淛は釈迦や朱熹の観点に対して、いずれも同意しなかった。それだけでなく、聖人だって分からないことがあると皮肉に見られることを書いている。結局天はどんなものか。彼にもわからなかったようだが、ただ天と理の関係は、実体と虚位、耳と聴覚の関係のようなものと断言している。しかしながら、彼もやはり「天」をただの物だと思っていない。人の理（道徳基準）と天の理（自然法則）は当たり前のように一致している。人の行動は天（自然）の道理に従わなければならない、そして天も絶対化されることになる。

12) 董仲舒著『春秋繁露』第四十六・天辨在人、中国哲学書電子化計画 (<http://ctext.org/zh>)。

13) この訳文は岩城秀夫の訳注によるもの。詳細は『五雜俎1』（平凡社、1996年）12-14頁。

そもそも、このような天の見方をめぐる論争は春秋時代から始まっている。馮友蘭は春秋時代の「自然観における唯物主義と唯心主義の闘争は、主に天という問題をめぐって展開した」と考えている。馮によれば天の意味は少なくとも五つの意味がある。

一つは「物質の天」、それは日常生活の中で見られ、地に相対する天、いわゆる空である。二つは「主宰の天」あるいは「意志の天」、つまり宗教において人格と意思を持つ「至上神」である。三つは「運命の天」、つまり気運である。四つは「自然の天」、それは唯物主義哲学者が指す自然である。五つは「義理の天」あるいは「道徳の天」、それは唯心主義哲学者が想像した宇宙の道徳的法則である。……殷周時代の統治者は「至上神」の存在を強調した、この「至上神」はもともと「帝」あるいは「上帝」と称されたが、後に「天」と称された。唯物主義思想において、このような「天」を含め、「義理の天」あるいは「道徳の天」を認められない。唯物主義者が言う「天」は、「物質の天」あるいは「自然の天」である。この時期において現れた唯物主義観点は、「主宰の天」という宗教観念と対立された。¹⁴⁾

もう一方、天の人格の特殊性に注目したのは津田左右吉である。津田左右吉は「上代シナに於ける天及び上帝の観念」¹⁵⁾において、中国式的考え方では「天」は人の感情を持っていないが、「天を人間らしい神として見」られてはいないという。

天が恵み、天が怒り天が賛げ天が禍するというような意味の語が随所に存在することは、何人も知っている。儒教政治学の根本思想である革命説が天の命といふ観念を基礎にしていることは、言うまでもない。儒家ではないが、天は人を愛し人を利するものであるとか、天の欲せざるところをなさず天に敬事すれば天がこれに福するとか、いうようなことは墨子の反覆説いたところであって、一々例証を上げるにも及ぶまい。天は国を建てたり滅ぼしたり、人に禍福を降したりする點に於いて、決して物理的の天ではない。一体に儒家の思想に於いて天が宇宙と人生とを主宰するものとして考えられていることは、いうまでもあるまいが、主宰者とすればそれが何か生きているもののように漠然ながら思われるのである。

(中略)ところが、そういうはたらきをする天が、やはり仰ぎ見られる天そのものであることは、同じ經典によって明らかに知られる。

(中略)目に見られる天が生きたものであり、或いはそこに生きたものがあるように考えていたにしても、それは決して人間らしい資質を有しているものではない。anthropomorphismに於いてのgodではない。でなければこんな風に目に見られる天そのものが人生を支配する働きを有ってはいわれなかったに違いないからである。

14) 馮友蘭『三松堂全集』第八卷(河南人民出版社、2000年)90頁。

15) 津田左右吉『津田左右吉全集』第18卷(岩波書店、1988年)296-318頁。

このように津田は「天」を、

- ① 目に見える天
- ② 思索の結果として生じた抽象的な概念。

の二つに分けた、そして②は①から生まれ、また②は逆に①に干渉すると説明し、中国では天に対する観点が雑多であったとしても、今までの中国人にはそれが雑多であることに対する困惑は見られない。各思想の間で曖昧な妥協をしたとしか思われぬが、その一方では、知識層において、「天」を理性的に認識したいという考えも持たれていなかったわけではない。しかし、どんなに努力しても、結局彼らの認識は感情的な天を超越しなかったと理解している。

4. 『学問のすすめ』における「天」の使い方

前文で言ったように、「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず」の中で、「天」は福沢が考えた翻訳語である。そしてここで考えるべきことは、福沢が（神ではなく）「天」を選んだ理由である。「天」に対して、福沢はどんな気持ちを持っていたのだろうか。それを解明するために『学問のすすめ』の中の「天」を全部掘り起こすほかはない。

『学問のすすめ』の中で、「天」については、以下のように使われている。（この表は先に述べた通り、「天」の意味を「そら・客観的」「自然・混合物」「神・主観的」3つに分け、それぞれの用例と出現回数をかかげ、さらに専門用語を抜き出したものである。）

表1 『学問のすすめ』における「天」の出現回数

意味	用例	出現回数	総計回数 (104)
そら、世界・客観的	天より降り来たるがごとく	1	55
	一天を与にし	1	
	天地	10	
	天下	43	
生まれつき、自然・混合物	天命	2	33
	天性	5	
	天理 天理人道 天理人情 天の道理 天の正道	12	
	天然	13	
	天の然しからしむるところ	1	
神・主観的	天に罪せらるる	1	12
	天の人を生ずる	1	
	天は富貴を人に与えずして	1	
	天誅（引用語）	2	
	天に代わり	2	
	天より定めたる法、約束	2	
	天は人の上に人を造らず・天より人を 生ずる・天の人を生ずるや	3	
専門用語	天秤	1	4
	天文	3	

この表でわかる通り、客観的なものと主観が交わったものが大半を占めている。その中でも、「天下」(43回)、「天然」(14回)は用いられた回数が多い。それに対して「神」のイメージを持つ用例は12回のみである。

最も注目すべきのは、翻訳語としての「天 (Creator)」である。しかし、この用例はかなり少ない。「天は人の上に人を造らず……」のほかに、同じ「初編」の

されば天より人を生ずるには、万人は万人みな同じ位にして、生まれながら貴賤上下の差別なく、万物の霊たる身と心との働きをもって天地の間にあるよろずの物を資り、もって衣食住の用を達し、自由自在、互いに人の妨げをなさずしておのおの安楽にこの世を渡らしめ給うの趣意なり。(「初編」)

と「二編 人は同等なること」の

天の人を生ずるや、これに体と心との働きを与えて、人々をしてこの通義を遂げしむるの仕掛けを設けたるものなれば、なんらのことあるも人力をもってこれを害すべからず。(「二編」)

総計3回しかなく、文脈において、いずれもいわゆる天賦人權説を説明するときに用いられている。それに対して、「神」という言葉はなかなか出て来ない。以下に示すように、福沢は神という概念も言葉自体も避けていたと見られる。(「神学」は神そのものを指しているのではなく、ただの専門用語だと思われるので、ここでは用例に含めなかった)。

表2 『学問のすすめ』における「神」の使用状況

意味	用例	出現回数	総計回数 (25)
本質の神	鬼神	1	7
	神代	1	
	臆病神	1	
	神仏	2	
	神	2	
本質の神ではない	神学	1	18
	神速	1	
	神経	2	
	精神	14	

また、「神」一文字で出現する例はわずか2つである。具体的には以下のような文である。

古の民は政府を視みること鬼のごとくし、今の民はこれを視ること神のごとくす。古の民は政府を恐れ、今の民は政府を拝む。この勢いに乗じて事の轍を改むることなくば、政府にて一事を起せば文明の形はしだいに具わるに似たれども、人民にはまさしく一段の氣力を失い文明の精神はしだいに衰うるのみ。(「五編 明治七年一月一日の詞」)

きかぬ薬を再三飲むがごとく、小刀細工の仁政を用い、神ならぬ身の聖賢が、その仁政

に無理を調査してして御恩を蒙らしめんとし、御恩は変じて迷惑となり、仁政は化して苛法となり、なおも太平を謡わんとするか。（「十一編 名分をもって偽君子を生ずるの論」）文脈からわかるように、この2回も神をマイナスの意味でとらえている。その代わり、最も多く使われているのは、やはり西洋文明と関連している「精神」という言葉である（14回）。福沢がいかに神仏鬼怪の話が嫌いか、これだけでも分かるであろう。福沢は「神鬼」の話が嫌いだった。そこで、「神」のような目で見られぬ、手で触れられぬものについて言及を避けたと思われる。しかし、西洋思想を解釈するとき、あの絶対的な権力を持つ「神」がどうしても出てきて、やむを得ず場合が出てくる。そして福沢は、意識してなのかどうかはわからないが、儒者がいつも口にしてしている「天」を使ったわけである。

フランスの「人権宣言」が示すように、近代民衆主義は「神」という純粋な宗教概念を避けたところに成立している。同じく中国の伝統思想においても、「神」を避け、人と自然において人の生き方をとらえている。福沢はこのような中国伝統思想や儒者の用語法（それは日本人の用語法でもあった）を用い、Creatorを翻訳するのに「天」を選んだのではないかと考えられる。ここで使われている「天」はただCreatorの翻訳語ではなく、東西文明の異同や啓蒙思想文脈の中のさまざまな意味合いの集合であることは明らかであろう。

第二章 「実学」の内実

国語辞書の「実学主義」の項目ではまず福沢の言葉を載せるほど、福沢は実学主義者であることは公認されているようなことだが¹⁶⁾、『学問のすすめ』において、「実学とはなにか」という肝心の命題について、福沢はさほど明瞭には述べていない。文だけに目を向ける学を批判する一方で、「実に役立つ学問の範疇自体が様々に揺れ動いているようにも見える。例えば『福翁自伝』では神なんぞ信ずるものではないと言っているのに対して、『学問のすすめ』では「神学」はよき学問としている。また「修身学」などの「実学」としての役割についても福沢自身の立場は曖昧である。「実学」の意味が曖昧であるとすれば、福沢がいう「学問のすすめ」とはどのようなことを疑わずにはいられない。

1. 「実学」の難解性

『広辞苑』（第六版）では「実学」について次のように説明している。

【実学】[朱子、中庸章句「其味無窮、皆実学也」] ①空理空論ではない、実践の学。実理の学。論吉、福翁百話「吾輩が多年来唱ふる所は実学一遍にして古風なる漢学に非ず」

16) 丸山真男は「福沢に於ける『実学』の転回」において「実学」を「倫理を中核とする実学（代表的なのは朱子学）」と「物理を中核する実学（近代科学）」と分けた。丸山真男著 松沢弘陽編 『福沢論吉の哲学』（岩波文庫、2001年）56頁。

②実際に役立つ学問。応用を旨とする科学。法律学・医学・経済学・工学の類。¹⁷⁾
また、「実学主義」については別の項目を設けて次のように説明している。

【実学主義】〔教〕(realism) 事実・実戦・経験または応用・実験を重んじる立場。形式化した人文主義の影響を受けた古典本位の教育に反対して一六世紀に起こり、一七世紀以降、自然科学並びに経験論に影響されて有力になった。日本では福沢諭吉が提唱。

上の「実学」の①と②の説明をさらに分析して両者の違いを強調すれば、次のようになる。

①はある学問に対する誉め言葉としてあり、それを否定する語は「虚学」であろう。¹⁸⁾

②は実際に価値(利益)を生じるための学問を指し、人の感情と関係なく、肯定も否定も有しない、中立的な言葉。

言い換えれば、「実学」の意味は優劣判断という個人の感情が加わる場合とそうでない場合がある。実際に優劣の判断が込められているのかどうかを見分けるのは非常に難しい。『広辞苑』の項目内にある例文、「吾輩が多年来唱ふる所は実学一遍にして古風なる漢学に非ず」は、①の意味合いの例文として挙げられているものの、実は②の意味合いで解釈しても、まったく違和感が生じない。しかも次の【実学主義】の項目まで読み続けると、むしろ②の意味で解釈する方が適切とも思われる。

『広辞苑』の説明として引用されるほど福沢諭吉は「実学」と深く関わり合っている。しかし、「実学」の言葉の意味自体に曖昧さが残る以上、福沢本人がいう「学問」の中身を問う必要がある。

2. 「学問」の定義

『学問のすすめ』において、福沢のいう「学問」は様々な位相をもち、福沢自身何度も繰り返し定義している。例えば初編(1872年2月)¹⁹⁾では次のようにいっている。

学問とは、ただむずかしき字を知り、解し難き古文を読み、和歌を楽しみ、詩を作るなど、世上に実のなき文学を言うにあらず。これらの文学もおのずから人の心を悦ばしめずいぶん調法なるものなれども、古来、世間の儒者・和学者などの申すよう、さまであがめ貴むべきものにあらず。古来、漢学者に世帯持ちの上手なる者も少なく、和歌をよくして商売に巧者なる町人もまれなり。これがため心ある町人・百姓は、その子の学問に出精するを見て、やがて身代を持ち崩すならんとて親心に心配する者あり。無理ならぬことなり。畢竟その学問の実に遠くして日用の間に合わぬ証拠なり。(『初編』)

17) 『広辞苑 第六版』(岩波書店、2008年)。

18) この意味の実学の反対語は「虚学」であると思われるが、「虚学」は『広辞苑』と『国語大辞典』(小学館2007年)に収録されていない。

19) 『学問のすすめ』初編は1872年2月(天寶曆明治4年12月)に初版され、以降5年かけて(1872-1876)次々と出版されたが、その後の1880年において合本された。以下各編を言及する場合はそれぞれ初版の時間を示す。(原本は国立国会図書館デジタルコレクション <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/808242>)。

明治以前の日本には中国の科挙のような官吏登用制度が存在しなかったために、学問・教養＝出仕（世）というルートは形式上なかった。出版業が成熟していない社会において、学問的著述によって生活できるほどの報酬を得ることもできない。一般人、福沢のいう「町人・百姓」が、どれほど心血を注いだところで、なんら生活の資にはならない「実のなき文学」に対して、福沢は「実に遠くして日用の間に合わぬ」と批判した。

その正否はさておき、福沢がここで（儒学者・和学者と違って）平民の立場をとっていることに注目したい。『学問のすすめ』はもともと民間読本あるいは小学校の教科書を想定して作られたもので、福沢の「役に立つかどうか」の判断基準も“一般人”の“日常生活”に役に立つかどうかことに基づいている。“身分の高い人”は福沢の論の視野の中には入っていない。つまり「人間は生まれつき平等である」という西洋由来の思想はこの論点の大前提となっている。ここでは「学問とは云々」と細かく議論されているが、そもそも議論が始まる以前に、福沢はすでに「和学者や漢学者」とは対立点に立っていた。

しかし、学問が平民の生活において価値があるかという視点はあまり一貫していないように思われる。初編が公表された一年半後、1873年（明治6年）11月に発表された二編では、福沢は学問を「有形の学問」と「無形の学問」に分けている。

学問とは広き言葉にて、無形の学問もあり、有形の学問もあり。心学、神学、理学等は形なき学問なり。天文、地理、窮理、化学等は形ある学問なり。いずれにてもみな知識見聞の領分を広くして、物事の道理をわきまえ、人たる者の職分を知ることなり。知識見聞を開くためには、あるいは人の言を聞き、あるいはみずから工夫を運らし、あるいは書物をも読まざるべからず。ゆえに学問には文字を知ること必要なれども、古来世の人の思うごとく、ただ文字を読むのみをもって学問とするは大なる心得違いなり。（「二編 端書」）

図示すると次のようになる。

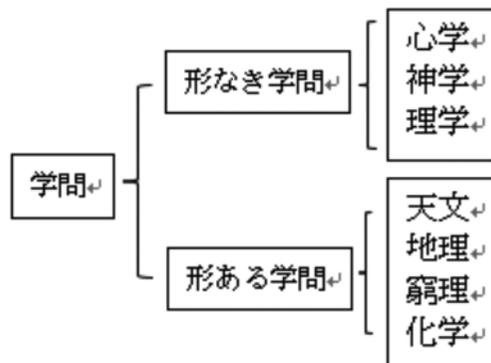


図1 学問の構成

福沢のこの分類において「形」とは何を指しているのか。研究の対象をそれぞれ比べてみると、「無形の学問」は人の心（思想）を研究する学問であり、「有形の学問」は自然实在の物を研究する学問であると考えられる。しかし福沢は、各分野の具体的な内容に触れているわけではない。これは福沢自身のイメージによる大雑把な区分であるといつてよい。ここでいう「心学」と「理学」はそれぞれ何を指しているのかははっきりしない。

「理学」について、前の例文以外は『学問のすすめ』中にまた以下のような用例ある。

インドの国体旧ならざるにあらず、その文物の開けたるは西洋紀元の前数千年にありて、理論の精密にして玄妙なるは、おそらくは今の西洋諸国の理学に比して恥ずるなきもの多かるべし。（「十編」）

古のインドの「文物」は精密で今の西洋の「理学」に比べて恥ずかしくないと言っている。ここで「理学」は哲学を意味すると思われる。

「心学」は何を指しているのか。『学問のすすめ』において、それ以上の説明はない。明治3年刊行した『学校の説』の中に「脩心学」ある。その「脩心学」は「是非曲直を分ち、礼義廉節を重んじ、これを外にすれば政府と人民との関係、これを内にすれば親子夫婦の道、一々その分限を定め、その職分を立て、天理にしたがいて人間に交わるの道を明らかにする学問にて、ひっきょう霊心の議論なり。」²⁰⁾と説明している。政府と人民から親子夫婦の関係まで大幅含まれているこの項目は、今にいうと恐らく「社会」という科目に属すると思われるが、ある種の道徳論でもいえよう。

「神学」はtheology、普通にはキリスト教神学いうのであろうが、ここでは日本の神道を指すのか、あるいはインド・中国伝来の仏教をも含むものなのか判然としない。福沢自身はおおむね「神」とは相性が悪いといつてよいが、洋学には好意を持っている。それで、福沢は「キリスト教神学」を「学問」に入れているのかもしれない。

どうしても「西洋学」のイメージが色濃く感じられやすいが、東洋において、哲学はいうまでもなく、地理学や天文学も存在するから、ここで言う「学問」は東西の区別なく、一般的知識を指している。そうすると福沢が批判した「文字を読むのみをもって学問とする」というのは、西洋的・あるいは現代的学科ではなく、文字上の表面的な知識のみを弄ぶ勉強の仕方である。

『学問のすすめ』十編において、福沢はふるさとの友人への手紙という形で学問について述べている。

学問するには、その志を高遠にせざるべからず。飯を炊き、風呂の火を焚も学問なり。天下の事を論ずるもまた学問なり。されども一家の世帯は易くして、天下の経済は難し。およそ世の事物、これを得るに易きものは貴からず。物の貴き所以はこれを得るの手段難ければなり。私に案ずるに、今の学者あるいはその難を棄て易きにつくの弊あるに似たり。（「十編」）

20) 『福沢論吉選集』第3巻（岩波書店、1980年）29頁。

飯を炊くことと天下を論じることは同じ学問であるといい、その違いは学問にあるのではなく、学問をする人の志にあると福沢はいつている。この段で分かるように、福沢にとっての「学問」はまさしく「広き言葉」であり、日常生活に役立つものはすべてが学問であり、「天下の事を論」じて難問に取り組むのも学問である。しかし、学問の範疇がいくら広いとしても、福沢は「文学」を受け入れない。この事実と「無形の学問」の段を合わせて考えれば分かるように、福沢が憎悪して批判しているのは和漢の学ではなく、文字そのもの（あるいは“先賢”の言葉）の解釈に熱中して注釈に注釈を重ねるような文献学者たちであり、残念なことに、和漢学者の中にはそのような人が多かったのである。

「文学」は「現実」に対して役に立たない。それでは、他の学問は具体的に現実の何に対してどのように役立つのだろうか。それについて福沢は「初編」においてこう論じている。

されば今、かかる実なき学問はまず次にし、もっぱら勤むべきは人間普通日用に近き実学なり。譬えば、いろは四十七文字を習い、手紙の文言、帳合いの仕方、算盤の稽古、天秤の取扱い等を心得、なおまた進んで学ぶべき箇条ははなはだ多し。地理学とは日本国中にはもちろん世界万国の風土道案内なり。究理学とは天地万物の性質を見て、その働きを知る学問なり。歴史とは年代記のくわしきものにて万国古今の有様を詮索する書物なり。経済学とは一身一家の世帯より天下の世帯を説きたるものなり。修身学とは身の行ないを修め、人に交わり、この世を渡るべき天然の道理を述べたるものなり。（「初編」）

『学問のすすめ』の読者層としては、もともと民間の一般人や小学校レベルの受講生が想定されていることを繰り返しておきたい。「いろは四十七文字の習い」、「手紙の文言」、「帳合いの仕方」、「算盤の稽古」、「天秤の取扱い」、これらはいずれも研究者や学者向けの学問とは言いがたい。また、「地理学」、「究理学」の類の役割について、確かに福沢は各学科の特徴に応じてうまくまとめているが、いずれも浅い気がする。地理学（Geography）はただ「風土道案内」の話だけではないし、究理学（Physics）は「物の性質やその働きを知る」だけで済むわけがない。しかし、まだこれらの学問の名も聞いたことのないような人にとっては、それで十分であろう。

また、そこに列挙されているのが、西洋学であることはそれぞれの役割から類推して明白であろう。この段の最後の「修身学」は、儒学でいう「修身・齐家・治国・平天下」の「修身」を指すのではない。『福沢全集』刊行に際して福沢自身が寄せた緒言に次のようにある。

明治元年の事と覚ゆ或日小幡篤次郎氏が散歩の途中、書物屋の店頭に一冊の古本を得たりとて塾に持帰りて之を見れば米國出版ウェーランド編纂のモラルサイヤンスと題したる原書にして表題は道德論に相違なし同志打寄り先づ其目録に従て書中の此処彼処を二三枚づゝ熟読するに如何にも徳義一偏を論じたるものにして甚だ面白し斯る出版書が米國にあると云へば一日も捨置き難し早速購求せんとて横浜の洋書店丸屋に託して同本六十部ばかりを取寄せモラルサイヤンスの訳字に就ても様々討議し遂に之を修身論と訳して直に塾の教場に用ひたり是れより塾中には物理経済等の外に新舶來の徳論を論ずることとなりて自

ら面目を新にし既に事の端緒を開けばウェーランドの外に諸種の修身教科書を得ることも甚だ易くして明治四五年の頃に至り童子教とも云ふ可き物語りの原書を翻譯したるものは童蒙教草五冊なり古来外国人のことを禽獣のやうに云ひ嘸し紅毛人の尻には尾があるなど思ひし輩に迷を解く為めには随分有力なる翻訳書なりしと思ふ。²¹⁾

彼自身、Moral Science を「修身論」と翻譯したことがあるという。が、前の引用で「修身学とは身の行ないを修め」という「修身学」は、「儒学」の道德觀念との関連性が全くないと言いつれられないようにも思われる。

福沢は西洋学を語るとき、論理性を二の次にして、文の学問ではだめであると主張した。福沢としては「日本国民」に対して助言するのが第一目標であり、当時の学者や政府側の人間のことなどさほど念頭になかったであろう。要するに、平民たちは生活に余裕のある上流社会のまねをすることなく、自分が生きるための学問を身につけ、おのおのが安楽にこの世を渡るべきであるというのである。「実学であるかどうか」のこの基準は、平民の日常生活とかけ離れている学問は、学問としての墮落を示すものだという判断に基づいている。

3. 漢学と識字への態度

福沢は“儒教を門閥制度と同じように憎悪している”と断じたのは丸山眞男だった²²⁾。福沢にとって、漢学や文学はただ「解し難き古文を読み、和歌を楽しみ、詩を作るなど、世上に実のない」学問である

学問はただ読書の一科にあらずとのことは、すでに人の知るところなれば今これを論弁するに及ばず。学問の要は活用にあるのみ。活用なき学問は無学に等し。(「十二編 演説の法を勧むるの説」)

1874年(明治7年)1月に発表した「四編 学者の職分を論ず」において福沢が指摘するように、新政府は成立したものの、「専制抑圧の気風」は依然として存在している。国民はいささか権利を得たように見えるが、「卑屈不信の気風」は変わることがない。日本国の文明を進めるためにはこのような気風を一掃する必要があるのだが、そのためには政府の命令や個人の論説によるのではなく、洋学者流に任せるといふ道しかないと思はれていた。

方今わが国の文明を進むるには、まずかの人心に浸潤したる気風を一掃せざるべからず。これを一掃するの法、政府の命をもってし難し、私の説論をもってし難し、必ずしも人に先だつて私に事をなし、もつて人民のよるべき標的を示す者なかるべからず。今この標的となるべき人物を求むるに、農の中にあらず、商の中にあらず、また和漢の学者中にもあ

21)『福澤全集 緒言』時事新報社編纂(国民図書株式会社、1926年)58頁。

22)「すなわち論吉にとって儒教攻撃は、彼が『親の敵』とまで憎悪した封建門閥制度の徹底的に掃蕩の問題と一にして二ではなかった。」丸山眞男著 松沢弘陽編『福澤論吉の哲学』(岩波文庫、2001年)12頁。

らず、その任に当たる者はただ一種の洋学者流あるのみ。（「四編」）

しかし、今日の洋学者は横文字を読んではいるものの、まだ「官あるを知りて私あるを知らず」という、かつて漢学者だったときの「悪習」を断ち切っていない。言い換えれば、漢学は上の権力者に奉公する術を備えているが、下の国民に対して無関心であると福沢は判断していて、次の引用にいうような「漢を体にして洋を衣にする」人に対して批判的である。表面だけではなく、中身にまで全般的に洋学を引き受けなければ文明開化の任には当たれないと彼は考えている。

しかるにまたこれに依頼すべからざるの事情あり。近來この流の人ようやく世間に増加し、あるいは横文を講じあるいは訳書を読み、もっぱら力を尽くすに似たりといえども、学者あるいは字を読みて義を解さざるか、あるいは義を解してこれを事実には施すの誠意なきか、その所業につきわが輩の疑いを存するもの少なからず。その疑いを存するとは、この学者士君子、みな官あるを知りて私あるを知らず、政府の上に立つの術を知りて、政府の下に居るの道知らざるの一事なり。畢竟、漢学者流の悪習を免れざるものにて、あたかも漢を体にして洋を衣にするがごとし。（「五編」）

そのどころか、今日に至っては、ただ難しい字を知っているにしても、「腰抜け」な学者がたくさんいると嘲笑している。

世の学者はおおむねみな腰ぬけにてその気力は不慥かなれども、文字を見る眼はなかなか慥かにして、いかなる難文にても困る者なきゆえ、この二冊にも遠慮なく文章をむずかしく書きその意味もおのずから高上になりて、これがためもと民間の読本たるべき学問のすすめの趣意を失いしは、初学の輩に対してはなはだ気の毒なれども、六編より後はまたもとの体裁に復かえり、もっぱら解しやすきを主として初学の便利に供しさらに難文を用いることなかるべきがゆえに、看官この二冊をもって全部の難易を評するなかれ。（「五編」）

しかし福沢は文字だけに執心する漢学者に軽視を示しながら、初心者に分かりにくい文を読ませるのは「気の毒」だと、自分の文章の分かりやすさについて懸念している。文字は学問のための重要な道具だが、道具そのものがどれほど立派であろうとも、使わないと学問にならない。それは識字に対しての福沢の根本的な原則だと見られる。

『学問のすすめ』初編が発行された翌年、福沢は初等教育の子どものために『文字之教』という教科書を書く。その端書において、福沢は漢字の存廃問題に対して、自分の見解を記している。すなわち、漢字は難しいが、直ちに廃止したらまた「不都合」が生じる、だから難しい漢字をやめ、ただ簡易な漢字を使えばいいという。「漢字を全く廃するべくして」と福沢はいうが、しかし、それを「行はんとするには時節を待つより外に手段なかる可し」と譲歩している。福沢は暫定的に漢字を認める。このように、漢字の修得しがたさを認識するからこそ、不可避免的に『学問のすすめ』において識字を「学問の急務」としているのではなからうか。

事の理を知らんとするには字を学ばざるべからず。これすなわち学問の急務なるわけな

り。(「初編」)

字を知るだけでは学問にはならないから、文字から道理に至る方策として、福沢は次のように解釈している。

これらの学問をするに、いずれも西洋の翻訳書を取り調べ、たいていのことは日本の仮名にて用を便じ、あるいは年少にして文才ある者へは横文字をも読ませ、一科一学も実事を押え、その事につきその物に従い、近く物事の道理を求めて今日の用を達すべきなり。右は人間普通の実学にて、人たる者は貴賤上下の区別なく、みなことごとくたしなむべき心得なれば、この心得ありて後に、士農工商おのおのその分を尽くし、銘々の家業を営み、身も独立し、家も独立し、天下国家も独立すべきなり。(「初編」)

身分制度が廃止され、福沢のような洋学者の理想の通り、日本国はようやく武士の天下から同等なる国民社会にまで進化した。しかし、一方の現実として、国民全体の大部を占めている平民層の教養が深刻な問題とされている。もう一方では、「文学」は国民教育の形で容易に手に入れることができるようになったが、その「文学」は同時に彼らの手を縛る“元凶”とも目されている。福沢の構想による“学問への道”はもっぱら西洋学への道である。あまりにもあたりまえのように見える結論だが、「西洋学へ向かう」というスローガンの裏でいかに「開化」し始めるかという問題も確かに存在する。

4. 実学の内実

福沢諭吉は『学問のすすめ』の中で「学問とは何か」につき特に明確に説明しているわけではない。言い換えれば、福沢は「洋学者」を自称し、文明開化の精神をあれほど唱えた一方で、東洋学の中の道徳と価値観も直接否定してはいない。それだけではなく、福沢にとって学問は「手紙の文言」、「帳合いの仕方」、「算盤の稽古」、「天秤の取扱い」などのような、今日の視点では変哲もない日常技能であるが、その代わりに、封建社会の特権が消えている（或いは消える予定だった）時代において生きるための術でもある。福沢がいう学問は“国民から国家までがこの近代世界において生存し続ける”という明白な目的を持たされている。

また、福沢は識字を当時の急務と述べているが、「文学」を強烈に批判している。彼の意識では「解し難き古文を読み」、「和歌を楽しむ」、「詩を作る」などは文字上の戯れに過ぎなかった。「実学主義者」というのは我々が「福沢諭吉」にはりつけたレッテルだが、「実学」は虚学に対する実学、すなわち優劣判断を含む学問なのか、それとも辞書が解釈しているような「実際に役立つ学問。応用を旨とする科学」なのか、結局のところ、彼自身は「実学とは何か」を論理的に説明はしていないというしかない。むしろ、福沢自身、この質問に対する関心を持っていなかったのではないかと考えられる。そのため、ここまで述べたように複数のニュアンスが同時に共存する新しい概念が無意識のうちに用いられているのである。

おわりに

以上、『学問のすすめ』における「天」と「実学」を分析した結果、この二つの概念の多意性が明らかになったと思われる。「天」という概念は、東洋において、そもそも理性と感情が交じり合うものとして定着されてきたが、西洋のCreatorという「非神像」概念を福沢は持ち込んでこれらの複数の意味合いを融合させた。「実学」はもともと優れた学問と実用的な学問という二つの意味に分かれていたが、西洋学の衝撃によって複合化した。福沢は『学問のすすめ』の中で文章の分かりやすさを特に注意したようだが、理論を説明するとき、東西新旧の意味合いが同一の用語の中で重なり合っている。このような語意の複雑化はまさに東西文化交渉の構造のパズルの一つであり、「文明開化」以来、しかも日本においてまだ働いているように見える。

